

第6回 JLPP 翻訳コンクール スペイン語部門講評

スペイン語文学研究者、翻訳家、
東京大学大学院人文社会系研究科教授
柳原孝敦

課題文はなかなか難しいものだったかと思う。難しいということは翻訳者の手腕の見せ所ということでもある。ということは力量の差が明瞭になるということでもある。最終選考に残った方々はどなたも、もちろん、日本語の理解度とスペイン語の表現力において素晴らしい人たちであった。それぞれの候補者がそれぞれの得意な箇所では表現に工夫を凝らして訳文を作っていたと思う。けれども、工夫を凝らすべきは表現（のみ）ではなく、様式でもあるべきだと気づかせてくれるような課題であった。

鹿島田真希の「波打ち際まで」の難しさはいくつかあるが、私はまずその話法に注目してみたことにした。固有名のない「女」が自らの心情を綴る言葉と彼女の行動を示す言葉、そして彼女がもう一人の、やはり固有名のない、心中事件の当事者となった「女」の行動や心情を想像する言葉。この三つの言葉が継ぎ目なく叙述される。別の言い方をすれば、とりわけ自由間接話法が多用されている。自由間接話法というのは、実は口語では珍しくもないのではないかと思うが、文語として、つまり一旦論理的言語としてのフィルターを通してみると、スペイン語でも他のヨーロッパ言語でも、意識の流れを捉える高度に文学的なテクニックとして捉えられる。鹿島田の短篇にはこの話法が満ちている。

この鹿島田作品に特徴的な自由間接話法と、ついでにいえば間接話法をもほぼ自動的に直接話法に変換するのは、あまりにも安易だ。もちろん、その方がわかりやすい。わかりにくい文章をわかりやすく訳すのはひとつの翻訳思想ではあるだろう。しかし、とりわけ文学作品の場合、ましてや今回の課題作のようなものの場合、それをしてしまっただけでは作品の持ち味を台なしにする。他の表現をどれだけ凝ったものにしても、埋め合わせはできない。それが私の理解だ。

もうひとつの難点は固有名のない「女」をどう表すかということ。幾人かの候補者がこれを la Mujer と大文字化して表現していた。大文字化は一般名詞の固有名詞化だ。一般名詞を固有名詞化することはまたアレゴリー化の手法でもある。こうすることによって「女」はこの小説に書かれた個別の人物ではなく、女一般に普遍化された存在となる。私自身は鹿島田作品はアレゴリーではないという理解だが、もちろん、アレゴリーとして理解する人がいてもいい。そのように訳されてもいい。ただし、アレゴリーにしてしまうためには他の細部の訳にもそのための工夫が必要になるだろう。

ところで、自由間接話法は口語では珍しい現象ではないと書いたけれども、日本語の場合、文語でも比較的が多いような印象がある。向田邦子の「お辞儀」にもそれが見られる。ただし、向田作品の最大

の難点はそこではないだろう。お辞儀という日常的なはずの仕草が非日常的な文脈で使われたときの周囲の反応、そして話者自身の心境の揺れがどのように効果的に表現されるかが問題だ。異化作用といえ
ばいいだろうか。よってここでは話法ではなく語法や語彙、状況説明の巧拙が問題になってくる。それ
まで日常に存在しなかった留守番電話などという器具の出現によって調子外れな言辞が取り交わされる
ことになったという導入から、そうした異化作用は説明されている。心憎い文章だ。負けず劣らず心憎
い訳が求められるところだ。